

第160回 埋蔵文化財セミナー

2026
7.18 (土) 13:30-16:30

舞鶴市西公民館

舞鶴市

田辺城跡

をめぐって



本丸

三の丸
武家屋敷

主催 京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
後援 舞鶴市

第160回埋蔵文化財セミナー

舞鶴市田辺城跡をめぐって

日 程

13時30分 開会あいさつ

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

常務理事・事務局長 村山和久

日程説明 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査課参事企画調整係長事務取扱 筒井崇史

13時40分 報 告 1

「田辺城跡の石垣について」

舞鶴市生涯学習部

歴史文化まちづくり課主事 尾崎優太氏

14時25分 報 告 2

「田辺城跡第34次調査」

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査課主任 加藤雄太

15時10分 休 憩

15時20分 講 演

「織田政権の城と海ー細川藤孝の田辺築城を考えるー」

京都先端科学大学特任准教授 中西裕樹氏

16時30分 閉 会

主 催 京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

後 援 舞鶴市

会 場 舞鶴市西公民館

田辺城跡の石垣について

舞鶴市生涯学習部歴史文化まちづくり課 尾崎 優太

1. はじめに

田辺城は、安土桃山時代に織田信長に仕えた細川藤孝^{ほそかわ ふじたか}が築城しました。築城時期を明確に示す史料はありませんが、10 年程の歳月をかけて天正 19 (1591) 年頃には完成したとみられています。また、慶長 5 (1600) 年、各地で勃発した関ヶ原合戦^{せんしやうせん}の前哨戦の一つに数えられる「田辺籠城戦」^{たなべろうじやうせん}の舞台として知られます。その後、京極氏^{きやうごく}、牧野氏^{まきの}と城主は変わりましたが、明治維新による廃城令により取り壊されるまでの約 280 年もの間、修繕が続けられながら城下町と共に政治・経済の中心として存在しました。田辺城の遺構は歴代城主で区分し、

(1) 細川期 【天正 9 (1581) 年頃～慶長 5 (1600) 年】

(2) 京極期 【慶長 6 (1601) 年～寛文 8 (1668) 年】

(3) 牧野期 【寛文 8 (1668) 年～明治 4 (1871) 年】

の 3 期に分けることができます。このうち、京極期の大改修によって今日知られている田辺城の輪郭が整備されたとされています。



図1 田辺城跡位置図

2. 田辺城跡の石垣調査について

(1) 第 33 次調査

調査地は、平成30年度に調査した田辺城跡第31次発掘調査地に隣接しています(図2)。第 31 次調査では、堀に面した本丸石垣が見つかっており、一部で細川期に遡る古い石垣を確認しています。第33次調査はこの石垣の延長にあたる石垣を確認することを主目的として令和5年度に実施しました。

【検出遺構】

①石垣(図3)

堀に面した本丸の石垣を約 40m 確認しました。いずれも上部は後世の開発等により石

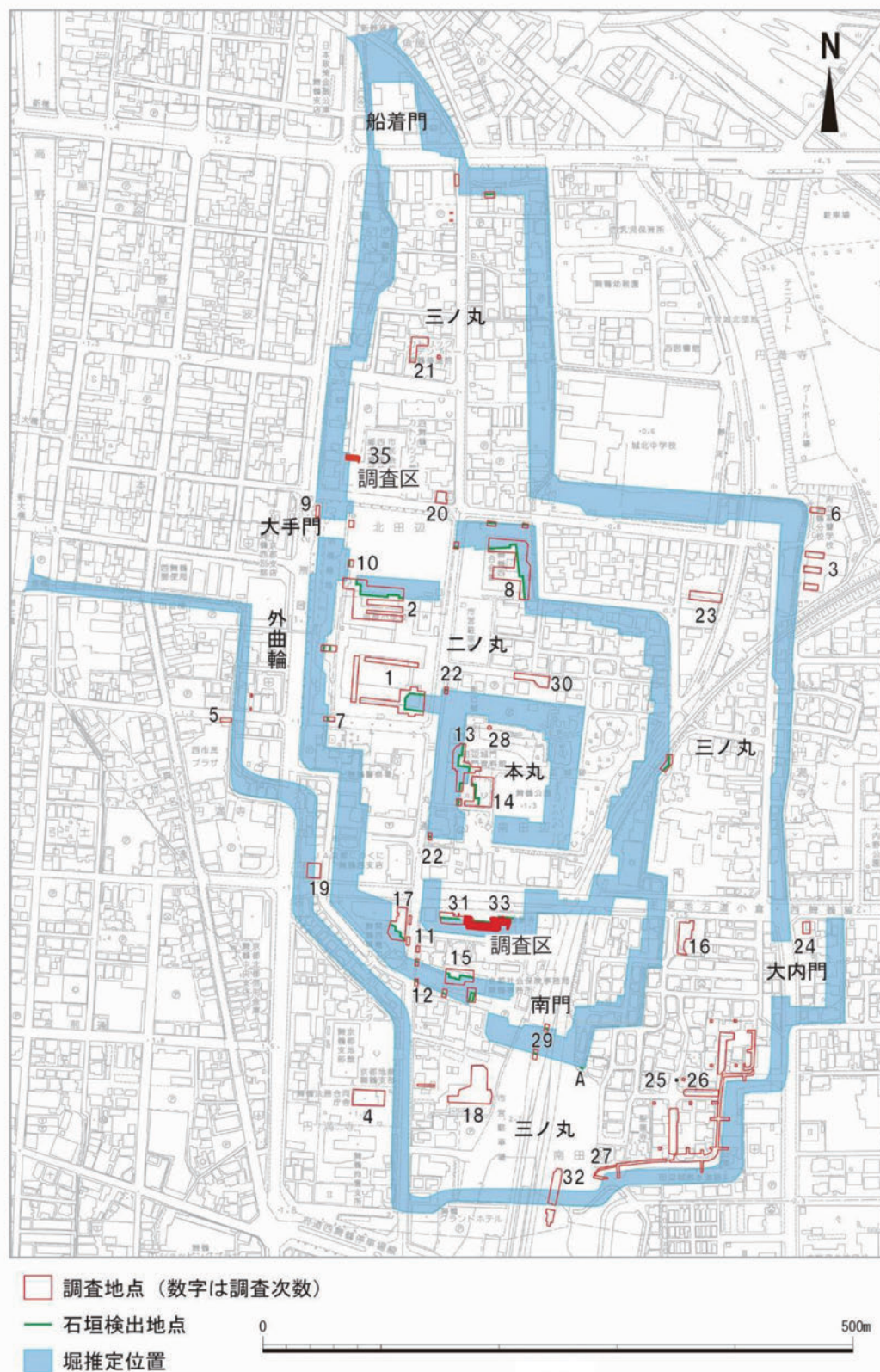


図2 田辺城跡と調査地点



写真1 田辺城跡第33次調査の石垣検出状況

材が抜き取られており、本来の高さは不明ですが、積み方や石材から2つに区分されます(石垣①②)。

石垣①のうち出隅部にあたる約14m^{ですみ}の石垣①Aと、東西方向に伸びる約11mの①Bの石垣を確認しました。①Aの最大残存高は約1m(石3段分)です。地盤補強のため胴木^{どうぎ}と呼ばれる木材の上に石垣が築かれており、石材について、加工が粗く、控えは短い傾向にあります。①Bは、最大残存高約2.3m(石7段分)で、石垣はさらに調査区外東側へ続いています。石垣の底は標高約^{マイナス}-1mで、隣接する第31次調査で見つかった細川期の石垣の深さとも概ね一致します。使用されている石材も大きく、最大のもので横約1.3m、高さ約0.9m、奥行き約0.6mを測ります。

石垣①の築造時期については、加工が粗い、又は自然石を石材に選び、控えが短いという特徴から、田辺城築城当初(細川期)の石垣と考えられます。

石垣②は、やや小ぶりの石材で積まれた石垣で、延長約15mを確認しました。最大残存高は約1.3m(石4段分)です。東側の石垣①の接続部で石垣が曲げられています。後述する土塁土留め^{どるい}を覆うように前面に築かれており、京極期以降に新たに築かれた石垣と考えられます。接続部の屈曲は石垣①とつなげるために石垣の方向を曲げることでズレを修正したものと考えられます。また、石垣②は延宝9(1681)年に行われた石垣の修復箇所と一致するため、たびたび牧野期に改修されたものと考えられます。

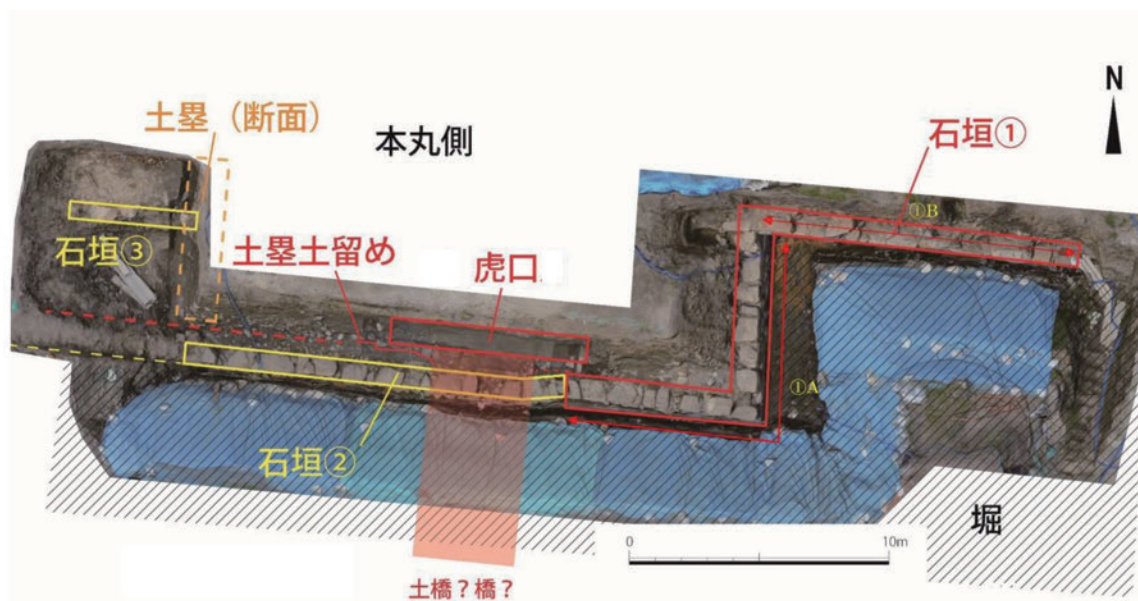


図3 調査区遺構平面

②通路状遺構(虎口入口)(図4・5)

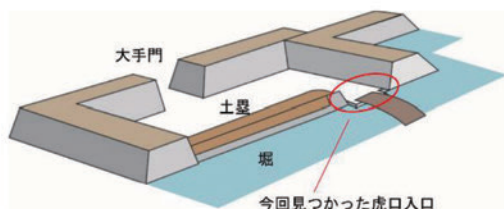


図4 細川期の虎口想定イメージ



図5 虎口入口と土塁土留め

調査区内の石垣南辺中央付近で、城内への進入口にあたる「虎口」部分と思われる通路状遺構を確認しました。中央には城内へ入る通路とみられる整地面があります。通路東側には入口の城壁となる石垣が2段分確認できました。この石垣はさらに城内側へ続いています。通路西側についても、土塁に接して石材の抜取り跡と考えられる痕跡が確認できたため、石垣等が存在した可能性があります。これにより、通路の幅は約6mと推測されます。また、西側には、城壁となる土塁の裾部分に小ぶりの石材を使用した東西方向の石列が確認できました(土塁土留め)。これは土塁の土留めのための「腰石垣」の痕跡と考えられます。土留め目的のため、高い石垣ではなかったとみられますが、後に高い石垣に改修するにあたり、石垣②がその前面に構築されたと推測されます。遺構東側の前面にも一部に石垣の裏込石と思われる栗石こしいしがきが見られます。この西側の土塁土留めと東側裏込石の間には、堀に面して石垣等の遺構がみられない空白地があります。この部分に対応するように、砂利敷の整地層も存在することから、堀

を渡るための何らかの施設が存在した可能性が考えられます。しかし、後に石垣②が築かれたことによって削られており、明確な遺構の確定には至りませんでした。橋などの通路が存在した可能性がありますが、幅は4 m程度とみられます。

京極期の改修により、田辺城の大手門は城の西側に、^{からめて}搦手門は城の東側に移転するため、京極期以降はこの付近に出入口はありません。絵図によると、細川期の大手門は城の南側に描かれており、今回見つかった通路状遺構は、細川期の虎口と考えられます(図8・9)。

③土塁・石垣③(図6・7)

調査区西側で断面を観察したところ、石垣②に伴う土塁及び石垣③を確認しました。前述した細川期の虎口に接する土塁を覆うように、京極期以降の土塁と思われる層が確認できました。また、京極期以降の土塁の城内側裾部で東西方向に延びる石垣及びそれに伴う裏込の層が確認されました。石垣③の城内側には、排水溝とみられる溝が1条と、城内側の整地面がみられます。京極期以降、幕末までの城内の地面と考えられます。

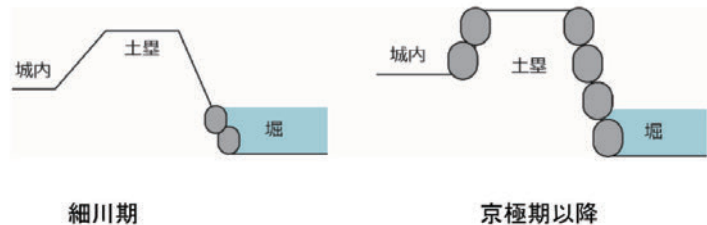


図6 石垣と土塁の変遷

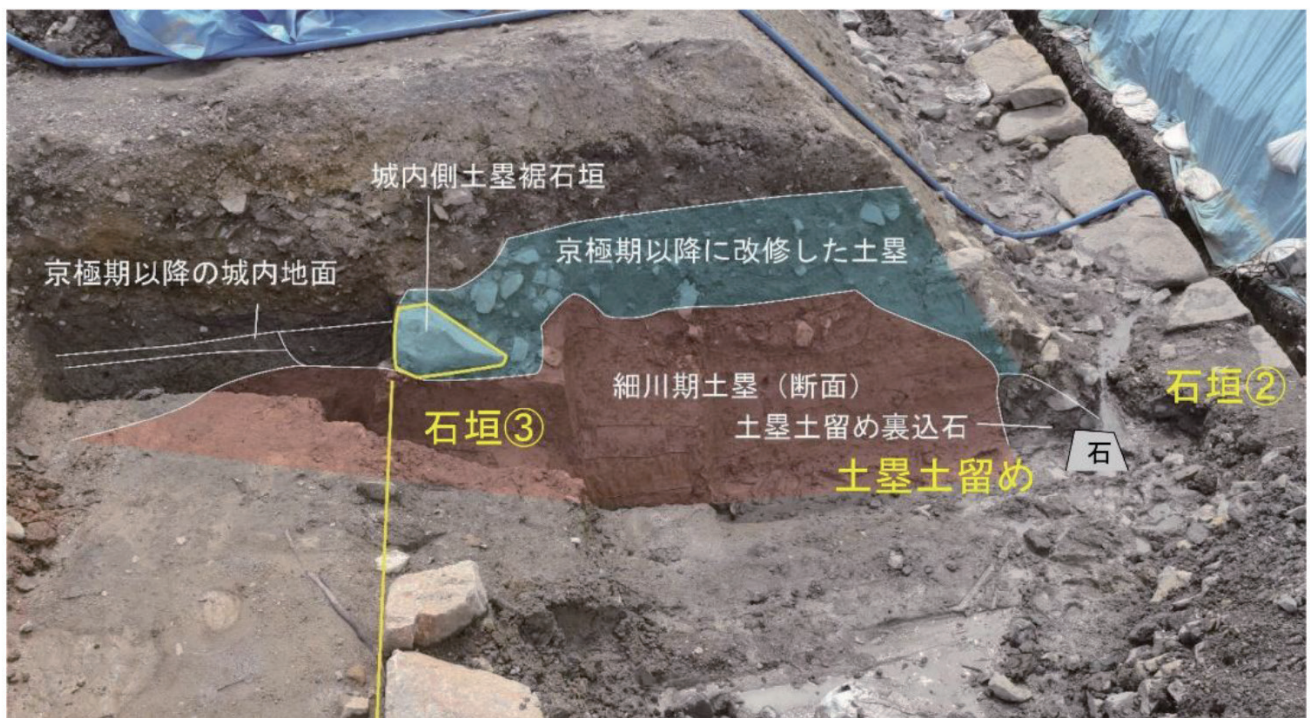


図7 調査区西側土層断面

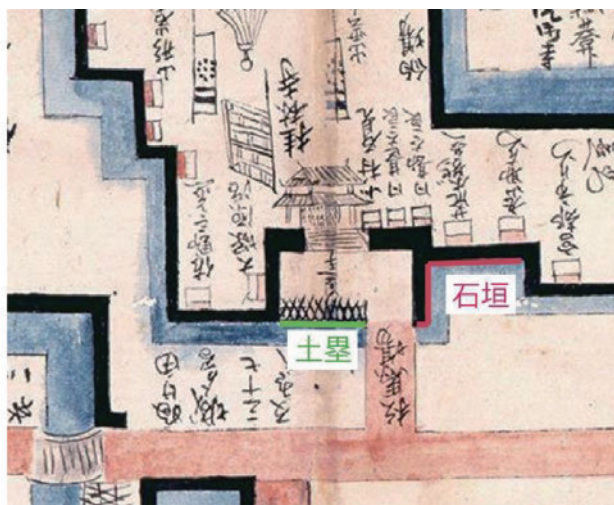


図8 「田辺城籠城図」(江戸時代)大泉寺蔵(部分)

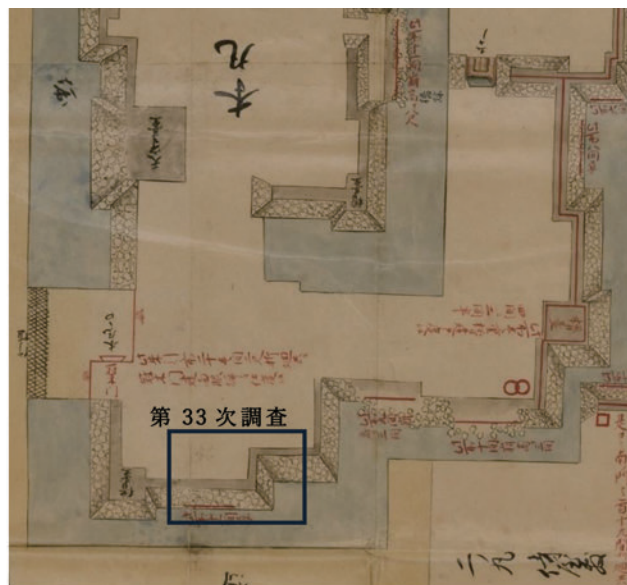


図9 「大滝家田辺城絵図」(江戸時代)個人蔵(部分)

(2) 第35次調査

調査は、公共施設の建設に先立って実施しており、調査地は田辺城の絵図によると三ノ丸石垣に該当し、南の大手門へ続く石垣の存在が予想されました。第35次調査は、その石垣を確認することを主目的として令和7年度に実施しました。

【検出遺構】

①石垣(図10～14)

今回の発掘調査で、堀に面して東西方向の石垣(約10m)と南北方向の石垣(約1m)を確認しました。南北方向の石垣はこれより南側は確認できず、後世の開発によって抜き取られたものと思われます。石垣全体の上部も後世に石材が抜き取られており、本来の高さは不明ですが、石垣の残存高は約1.6m～1.7mを測ります。石材は花崗岩^{かこうがん}が使用されており、角度は約75度と急な勾配で直線的に石垣が積まれていました。東西方向の石垣から、横約1.1m、高さ約1.3m、奥行き0.4mを測る石材を1石確認しました。

また、東西石垣において以下の2つに分けられました。

(石垣A) ……自然石を多く使用。基底から1～2段目の石垣。

(石垣B) ……割石を多く使用。割った面を石垣の表に置く。3段目から上の石垣。

石垣Aは、第33次調査の石垣①と同様に自然石や加工が粗い石材が用いられていました。しかし、細川期の石垣を描いた絵図では、この東西石垣は描かれていません。このことから、石垣Aの築造時期は京極期であり、特に京極高知が三ノ丸を拡張した慶長～元和年間(17世紀初頭)と考えられます。

また、今回調査した石垣が描かれる延宝9(1681)年の「大滝家田辺城図」(図15)では調

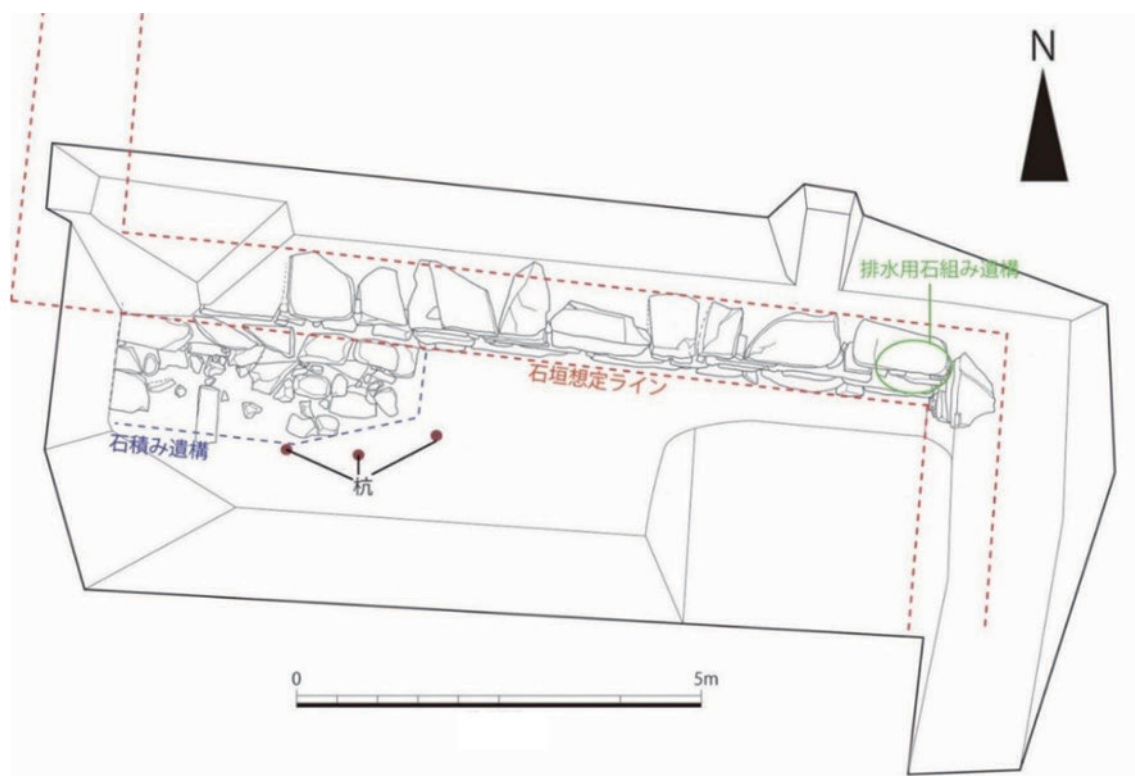


図10 田辺城跡第35次調査平面図

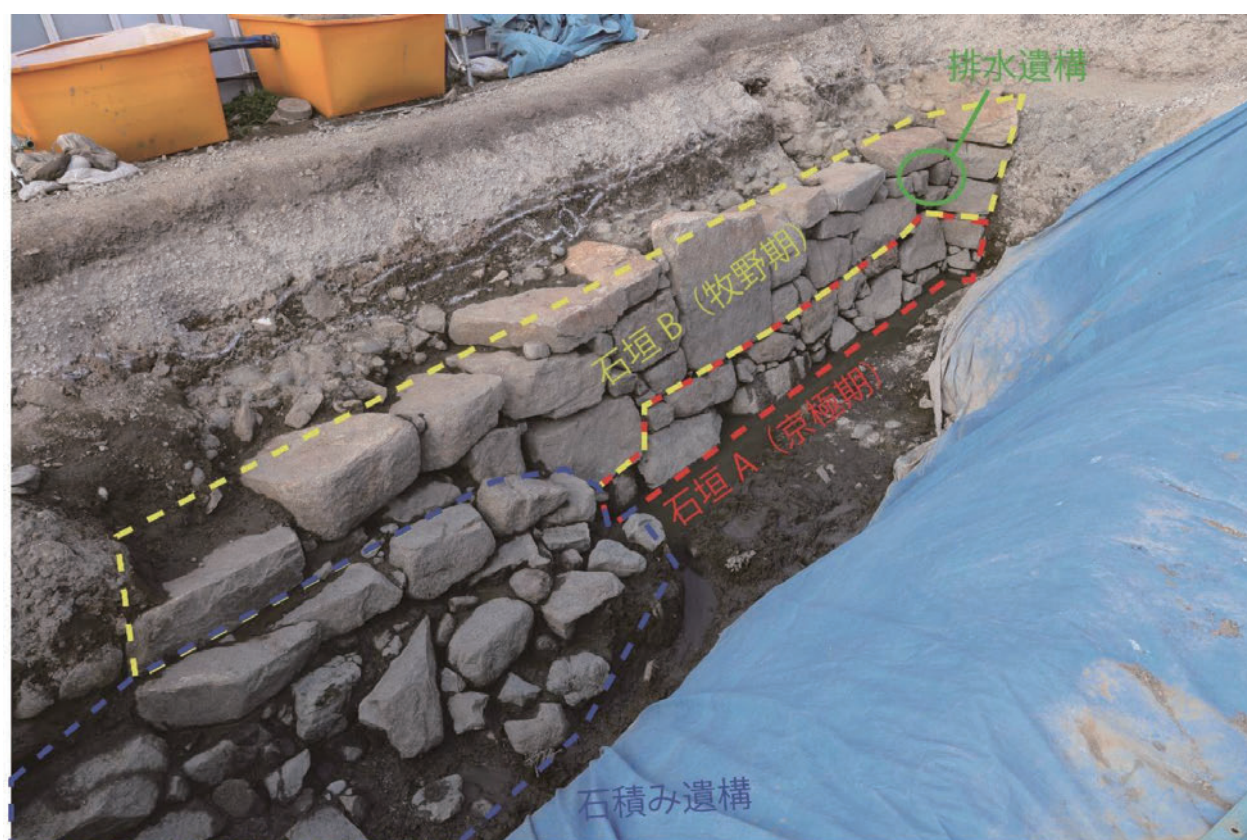


図11 田辺城跡第35次調査石垣の検出状況



写真2 排水遺構

査地点の石垣について、「此所二間崩、高さ二間」の記述があり、東西石垣が崩れていたことが確認できます。このことから、石垣Bの時期は牧野期であり、京極期の石垣が崩れたものを石垣Bのように修復したものと考えられます。

②排水遺構（図10・11、写真2）

石垣の屈曲部付近から石組みの排水遺構が確認されました。左右には幅約0.2m、高さ約0.3mに整形された石材が置かれています。排水口は約0.3mの大きさです。標高は、^{マイナス}-0.3mの位置にあります。牧野期に城内側から堀へ排水するために設置されたと思われます。

③石積み遺構（図10・11）

調査区西側に本来の石垣前面を覆うように石材を積み上げた遺構を確認しました。石材の大きさは0.1m～0.8mとばらつきがあり、自然石を使用しています。石積み遺構南端には、木製の杭が打たれており、石材が崩れるのを防止する石留めの役割があったものと思われます。

石積み遺構は、東西石垣の西側の屈曲部付近まで続いており、石垣の中で強度の弱い屈曲部、特に石垣の基底部に石を置くことで、強度を上げ石垣が崩れなくすることを目的に積まれたものと思われます。

3. まとめ

今回は、令和5年度に実施した田辺城跡第33次調査、令和7年度に実施した第35次調査の成果を報告いたしました。

第33次調査では、田辺城本丸南辺の石垣や土塁を確認し、それらの構造の変遷を明らかにすることができました。特に、これまで実態が不明瞭な細川期の田辺城の縄張りを考える上で貴重な成果となりました。

第35次調査では、大手門へと続く三ノ丸石垣を確認し、17世紀後半に実施された三ノ丸石垣の修理の様相を明らかにすることができました。

今後の調査によって、大手門や細川期の田辺城のさらなる解明が期待されます。

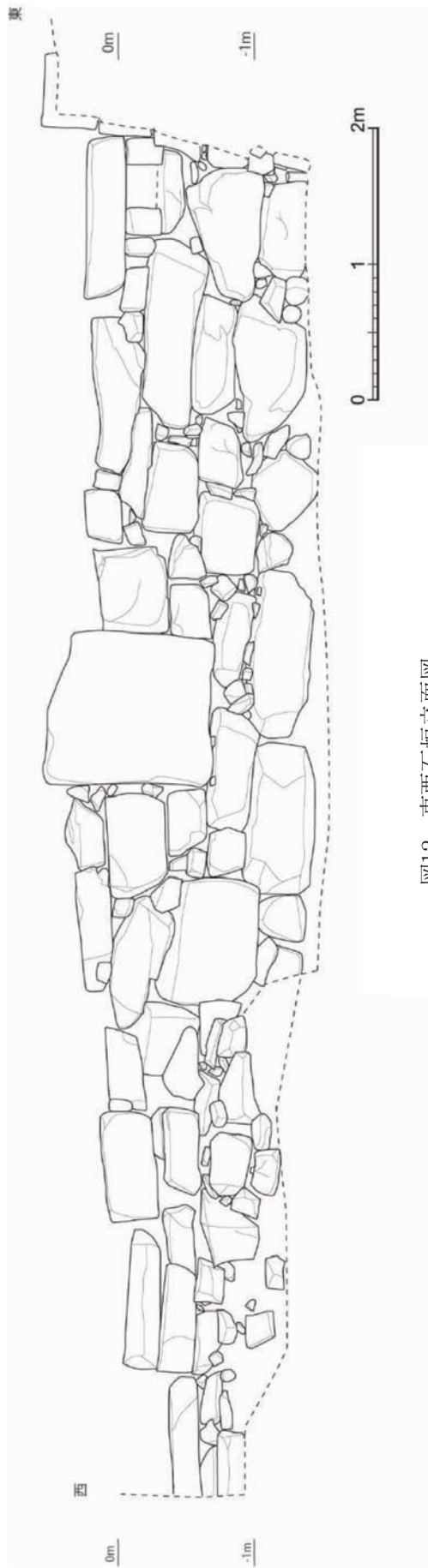


图12 东西石垣立面图

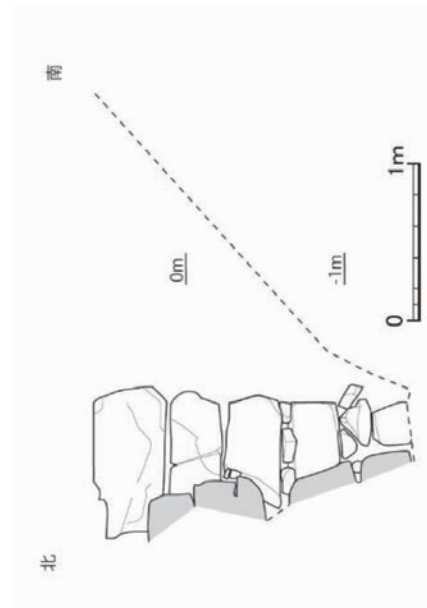


图13 南北石垣立面图

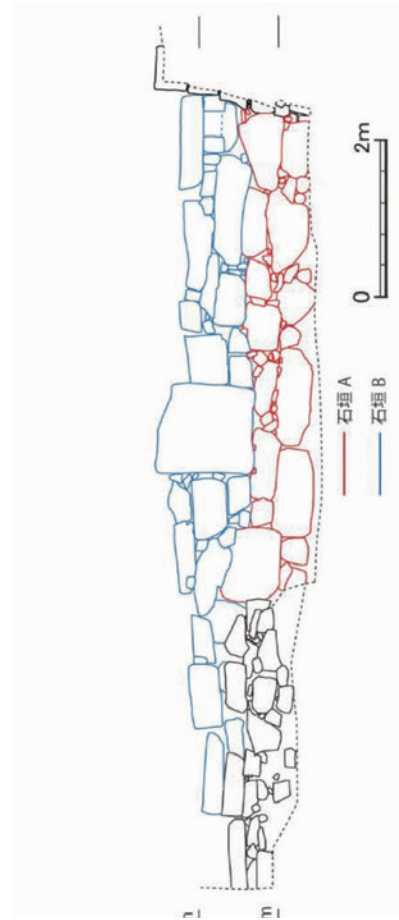


图14 石垣 A · 石垣 B 略图

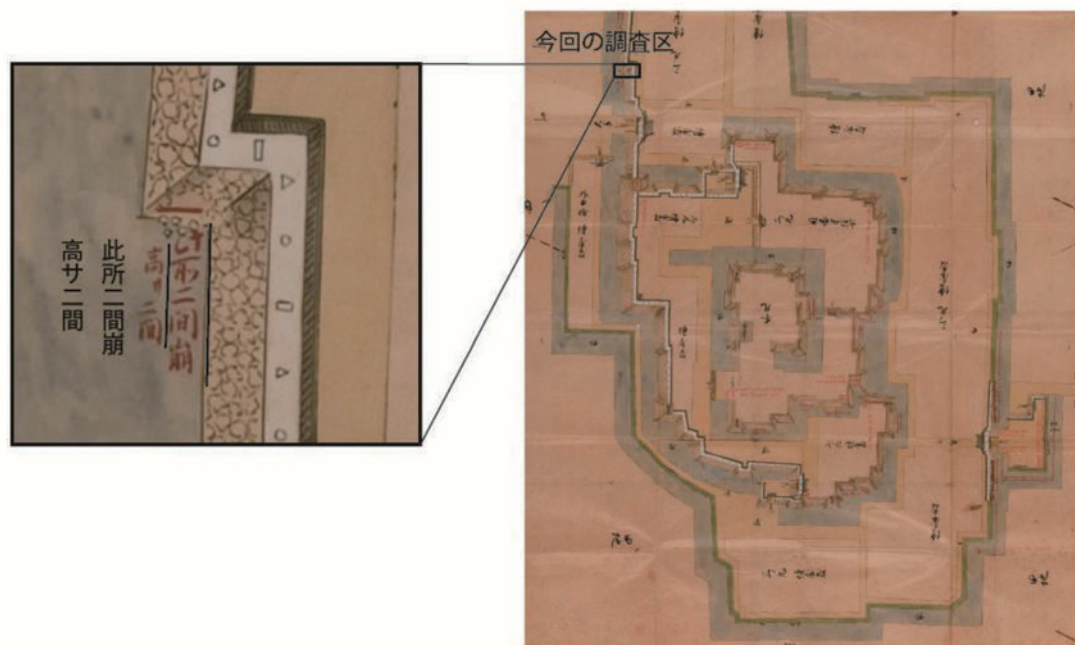


図15 大滝家田辺城図(江戸時代) 個人蔵(部分)

【参考文献】

北垣聰一郎 1987 『石垣普請』 ものとなりの文化史 58 法政大学出版局

舞鶴市市史編さん委員会 1993 『舞鶴市史・通史編』(上) 舞鶴市

舞鶴市 2024 『田辺城跡第 33 次調査発掘調査報告書』(舞鶴市文化財報告書第 54 集)

舞鶴市 2026 『田辺城跡第 35 次・女布遺跡第 15 次発掘調査報告書』(舞鶴市文化財報告書第 57 集)

田辺城跡第 34 次調査

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課 加藤 雄太

1. はじめに

田辺城跡は、伊佐津川の左岸に広がる西舞鶴市街地にあります。本丸を中心に二ノ丸、三ノ丸を配置し、それらを堀で囲んだ「輪郭式平城」^{りんかくしきひらじろ}と呼ばれる造りの城です。天正 10 (1582) 年の本能寺の変のあと、細川藤孝(幽斎)が隠居するための城として築されました。その後、慶長 5 (1600) 年の関ヶ原の戦いの前哨戦^{ぜんしょうせん}として知られる「田辺籠城戦」^{ろうじょう}などを経て、城主が何度か代わりながら明治時代まで残りました。

今回の発掘調査は、京都府舞鶴警察署を新しく建てる工事に合わせて、京都府警察本部の依頼で行われました。

2. 調査の概要と地層の重なり(基本層序)

(1) 調査の概要

田辺城の歴史は、大きく 3 つの時代に分けられます。天正 10 (1582) 年～慶長 5 (1600) 年の「細川氏時代」、慶長 6 (1601) 年～寛文 8 (1668) 年の「京極氏時代」、寛文 8 (1668) 年～明治 6 (1873) 年の「牧野氏時代」です。

調査をした場所は田辺城の三ノ丸にあたりです。調査の結果、細川氏時代、京極氏時代(前半・後半)、牧野氏時代、そして近



図1 田辺城跡位置図(国土地理院 1/25,000)

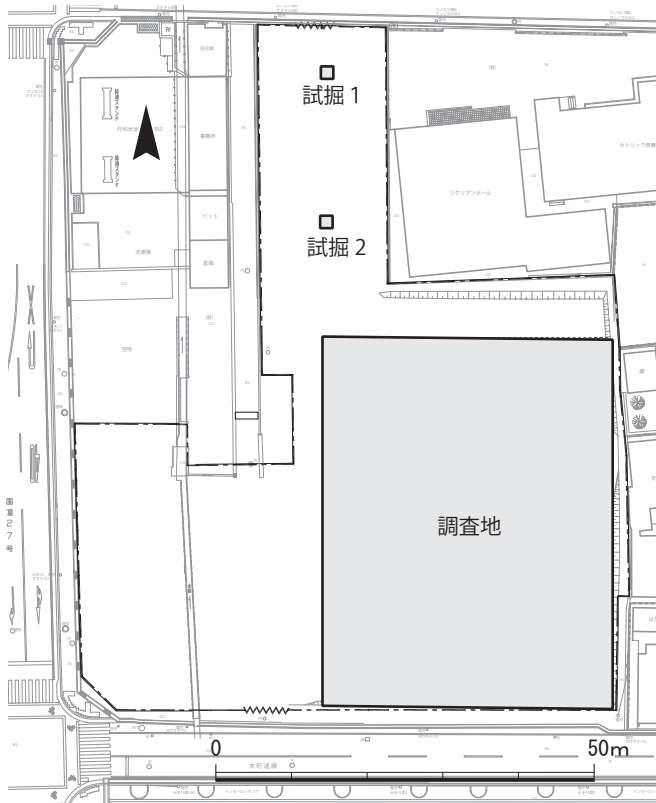


図2 田辺城跡調査地位置図(S = 1/1,000)

代(加佐郡役所があった時代)の合計5つの時期の遺構(跡)を大きく3つの面で検出しました。

調査地の西側では、田辺城の中の道路や、武家屋敷の境目を示す杭^{くい}の列、石でできた溝などが見つけられました。屋敷の境目は時期によって少しずつ動いていますが、だいたいの位置は江戸時代(延宝・元禄年間、1673～1704年)に描かれた絵図にある武家屋敷の境目や道路と一致しています。

また、それぞれの時代の武家屋敷跡からは、竹の筒と木の桝^{ます}や桶^{おけ}を組み合わせた水道施設(上水施設)が見つかったほか、京極氏時代の層からは、庭園の池のような跡も確認されました。この水道施設は、近くの「真名井の清水」などから湧き水を引いていたと考えられます。

調査地である田辺城三ノ丸は身分の高い武士が住んでいた場所です。田辺城において、これほど大規模な調査は過去になく、当時の武士たちの暮らしぶりを明らかにすることができました。

(2) 基本層序(地層の重なりについて)

地面を掘り下げていくと、次のように地層が重なっていました。

表層の碎石: 調査地全体を覆っていた碎石(細かく砕いた石)は、2回に分けて敷かれており、厚さ15cmと45cmの2つの層になっていました。これは昭和時代に建てられた市民会館が解体された後、駐車場として使われていた時のものです。

第3層: コンクリート片などを含む、市民会館解体時の土です。

第4層: 焼けた土や土器のかけらを含む灰茶色の土です。市民会館が建つ前の、幕末から加佐郡役所があった時代にかけて入れられた土です。

第5～8層: 第5層は焼けた土の層で、一緒に

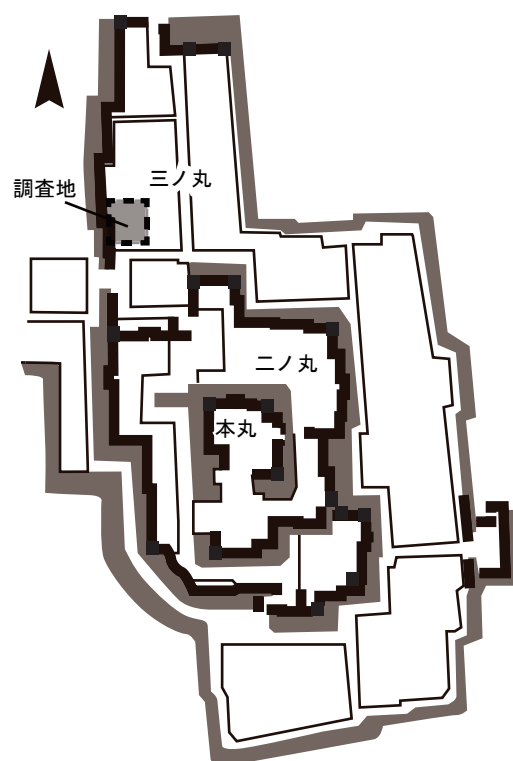


図3 田辺城跡平面図
(牧野家文書「延宝元禄年代田辺城図」による)

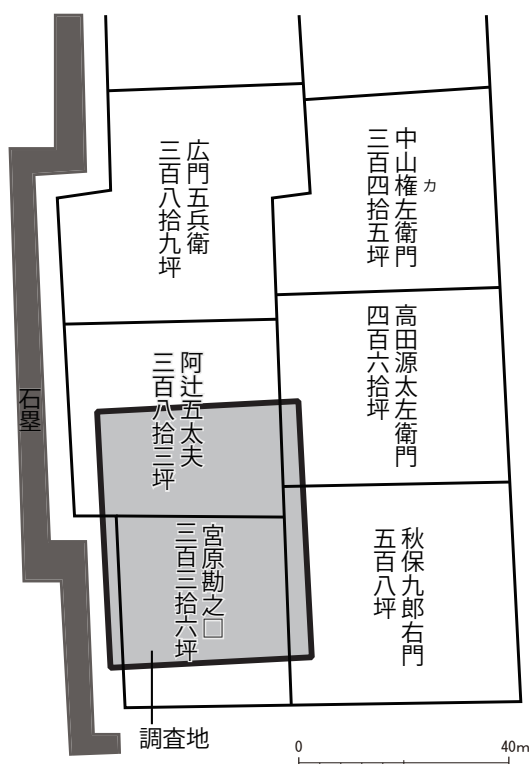


図4 田辺城武家屋敷と調査地位置図

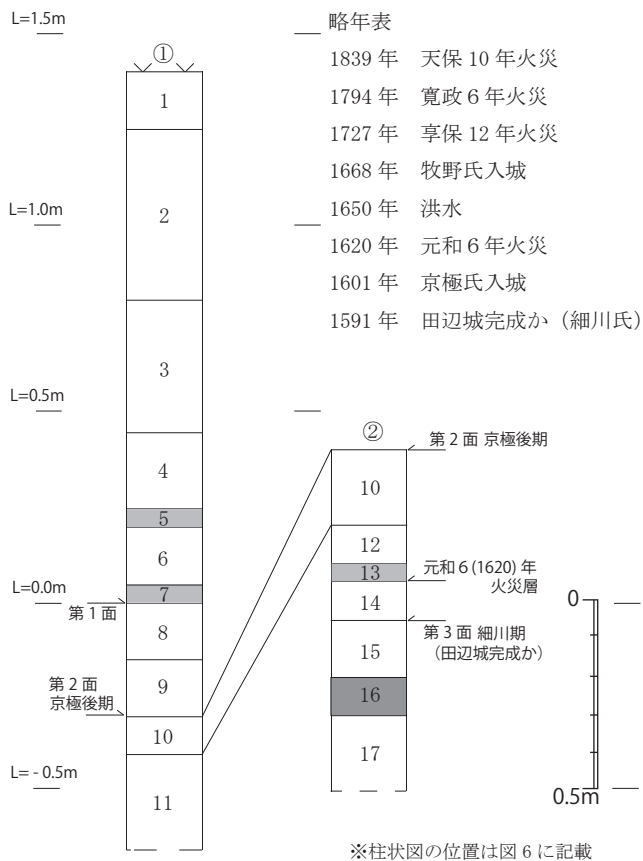


図5 田辺城跡柱状図

出土した陶磁器から寛政 6 (1794) 年の火災によるものと考えられます。その下の第 6 層は牧野氏時代の土で、さらに下の第 7 層は享保 12 (1727) 年の火災の跡だと推測されます。つまり、第 6 層の上の面は 1727 年から 1794 年の間に人々が生活していた面だと言えます。第 7 層の下の第 8 層は厚さ 20cm ほどの土で、1727 年の火災より前の生活面だと考えられます。

第 1 面の調査 近代から 1727 年の火災直前までを中心とする面を「第 1 面」とし、重機で第 8 層の上まで掘ってから調査を行いました。第 1 面の北側と南東部は、近代の工事などで破壊されて残っていませんでした。

第 8 ~ 10 層 第 8 層と第 9 層はそれぞれ厚さおよそ 20cm ほどの造成土 (土地を整えるために入れた土) です。何度か土を入れて土地を高くした跡だと考えられます。第 9 層を取り除いた面から、土を固めた床 (三和土) や建物の土台となる石 (礎石) などが見つ

かったため、ここを「第 2 面」として調査しました。第 2 面は、京極氏の後半 (1620 ~ 1668 年) にあたると判断しました。

第 11 ~ 14 層 第 11・12 層は砂混じりの土で、建物があった場所の下には木の葉や枝、生活用の器などが敷き詰められていました。第 13 層は元和 6 (1620) 年の火災の跡です。その下の第 14 層の上面には京極氏の前半 (1601 ~ 1620 年) の遺構が残されていました。

第 15 ~ 17 層 さらに下の第 15 層の上面を細川氏時代の遺構面と判断し、ここを「第 3 面」として調査しました。この層では、角張った石を敷いた上に植物の葉を敷き詰め、土をかぶせて叩き固めるという特徴的な工事が行われていました。その下の第 16 層は遺物を含まない自然に積もった土壌で、一番下の第 17 層は白い砂の層が続くため、田

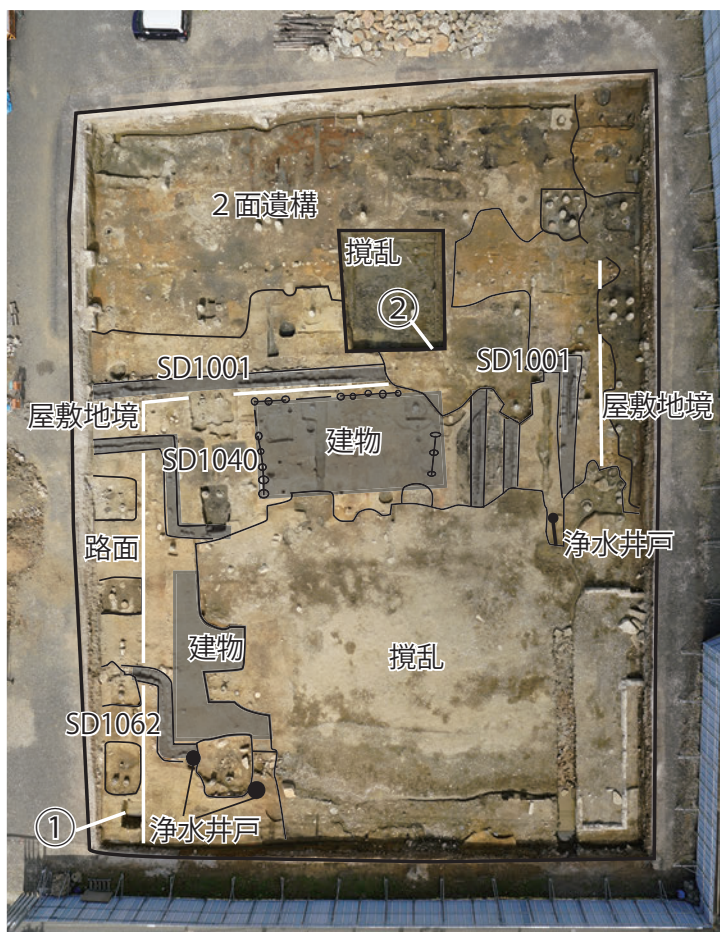


図6 田辺城跡第1面(上が北)

辺城が造られる前の自然な地面だと考えられます。

3. 見つかった遺構(昔の建物の跡など)

(1) 第1面(牧野氏時代)

石組溝 SD 1001 調査地の中央で見つかった石組の溝です。調査地を東西に分けるように造られ、東側で南に直角に曲がっています。この溝は江戸時代の絵図にある屋敷の境目と沿っており、武家屋敷を区画する溝と考えられます。溝の中には土管が敷かれており、近代に再利用された見えない水路(暗渠^{あんきょ})と考えられます。東側の溝の基礎に使われていた木材に「京都府」の焼き印があったため、少なくとも一部は明治9(1876)年以降に改造されたことが分かります。江戸時代の武家屋敷の区割りが近代までそのまま引き継がれて使われていたことを示す重要な発見です。

石組溝 SD 1062 調査地の南西部で見つかった石組の溝です。火災の跡が多く残っており、火事があった時に使われていた溝だと考えられます。当時の城内道路を横切るように造られ、屋敷の中に入ると建物に沿って2度直角に曲がっています。建物の屋根から落ちる雨水を屋敷地外に排水する溝と考えられます。



写真1 石組溝SD1001と埋設土管

ちる雨水を屋敷地外に排水する溝と考えられます。

石組溝 SD 1040 SD 1062の北側にある溝です。同じく道路から屋敷内に入り、2度直角に曲がっています。道路と屋敷の境目付近には、塀が建てられていた痕跡も見つかりました。この溝には火災の跡が含まれていないため、建物からは少し離れた場所にあったと考えられます。



写真2 石組溝 S D 1062 (南西から)



写真3 屋敷地境の一部 (西から)

屋敷地境(屋敷の境目) 調査地は4軒の武家屋敷にまたがっており(図3)、その範囲を区切る塀を支えるための杭列が見つかりました。火災や城主の交代に伴い、何度も作り直されたようです。

(2) 第2面(京極氏後半)

池 S G 2025 調査地の東側中央部で見つかった庭園の池の跡です。北側にある上水井戸から水を引いていたと考えられます。滝をイメージして大きめの石を配置した部分などがありました。池の南西部にある屋敷から池を眺めるような造りになっており、位置関係から「五老ヶ岳^{ころうがたけ}」の景色を背景として取り入れる工夫(借景^{しゃっけい})がされていたと思われます。

排水木樋^{はいすいもくひ} S D 2035 調査地の中央西よりを南北に延びる、水はけのための施設です。屋敷の下に埋められており、一本の木を加工したものや複数の板を組み合わせ、水路を造っていました。不要になった生活用水を流すためのものでした。

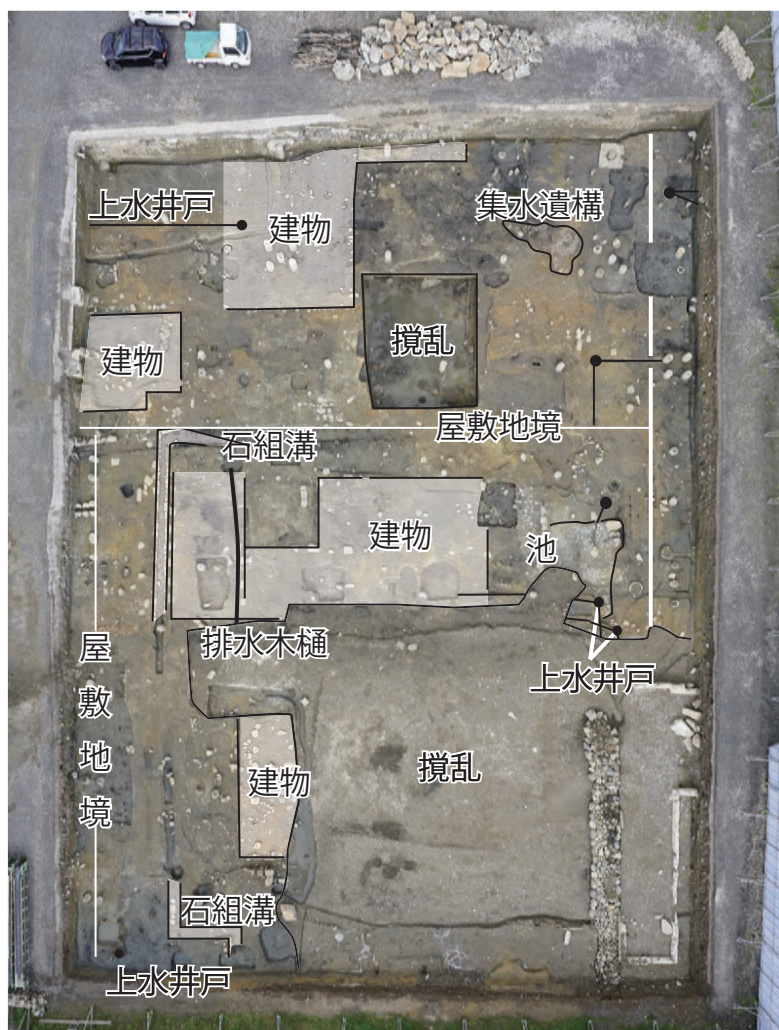


図7 田辺城跡第2面(上が北)



写真4 池S G 2025(南西から)



写真5 池の陸部と導水部(南西から)



写真6 排水木樋S D 2035(北から)



写真7 上水井戸S E 1063・S E 2037(南から)

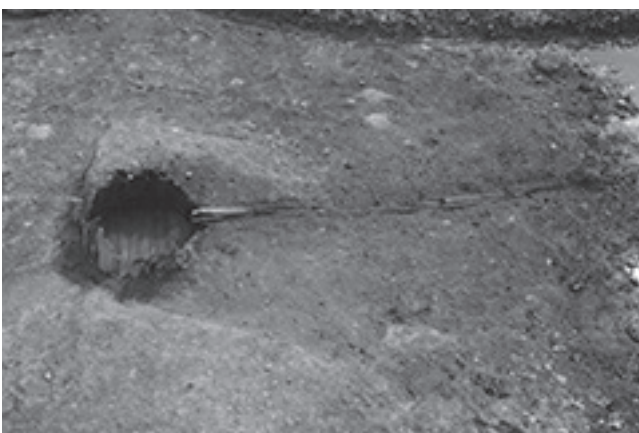


写真8 上水井戸S E 1063(西から)



写真9 幼児の下駄出土状況(東から)

上水井戸（水道の跡） 近代から京極氏の時代まで、様々な時代の水道の跡が見つかりました。木の桶や樽を土に埋めて、外から竹の管で湧き水を引き込んでいました。桶から水を汲んだり、樽に水を貯めて別の場所に送ったりと、高度な水道の仕組みが整えられていたことがわかりました。



写真10 上水井戸 S E 3009 検出状況



写真11 上水井戸 S E 3009 樽内検出状況

(3) 第3面(京極氏前半・細川氏時代)

礎石建物 調査地の南西側で見つかった建物の跡(土台の石・赤色表示)です。南北に約5.4メートル(3間)の長さがありました。同一面では京極期前半の建物群も検出しています。注目すべきは、この建物が、後の京極氏時代以降の路面上にあたることです。京極氏の田辺城築城時に縄張りが変更されたことを示しています。

4. おわりに

今回の調査では、田辺城跡の三ノ丸(武家屋敷があった場所)から、細川氏、京極氏、牧野氏という3つの時代の遺構が見つかりました。西側で見つかった屋敷の境目や道路の跡は、江戸時代の絵図とほぼ同じであり、当時の屋敷割りが幕末まで維持されていたこと

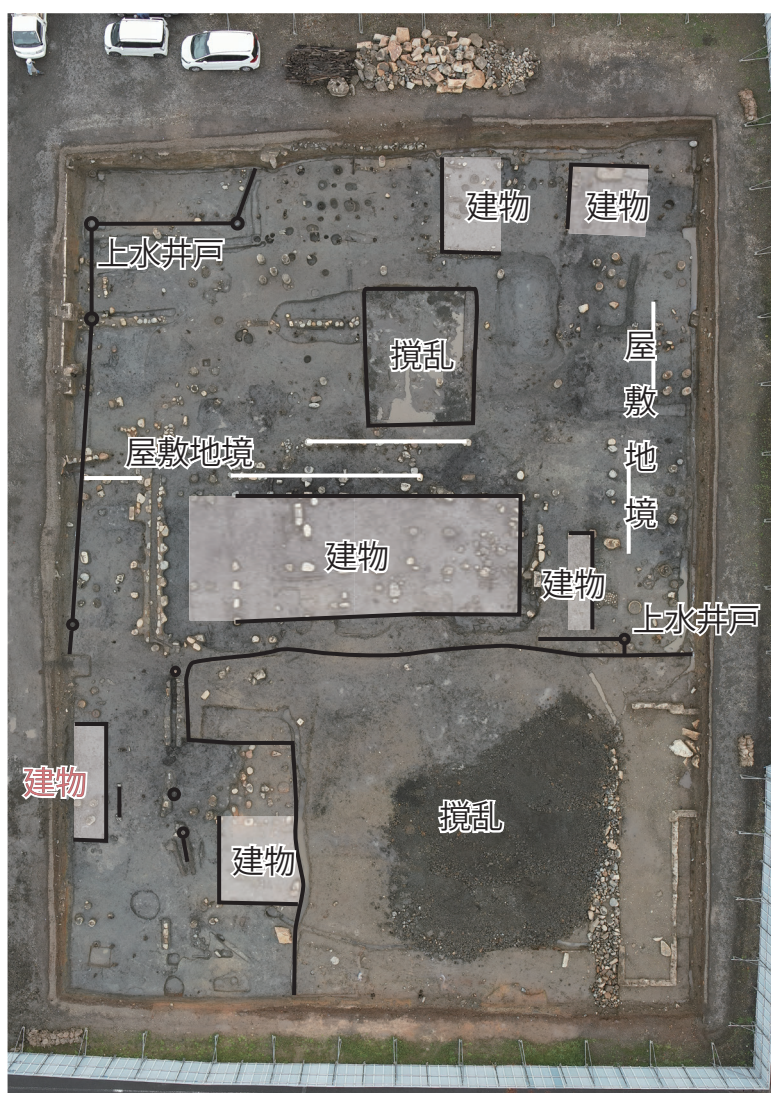


図8 田辺城跡第3面(上が北)

がわかりました。しかし、一番古い細川氏の時代の建物は、それ以降とは違う独自の区割りで建てられていたことも明らかになりました。

また、湧き水を引いた高度な水道設備や、山の景色を取り入れた庭園の池の跡なども見つかり、お城に住んでいた武士たちの暮らしぶりが少しわかりました。細川氏時代の土器や陶磁器、木製品なども見つかり、当時の状況を知るための重要な成果となりました。

さらに、今回の調査では江戸時代前期の木製品がたくさん見つかったことも大きな成果です。漆碗^{うるしわん}、下駄^{げた}、桶^{はうき}、箒^{ふなかつし}、舟形代などが出土しました。今後、昔の人々がどのように木材を選び、加工して生活の道具にしていたのかが解明されると期待されます。今回見つかった木製品は、京都府内の歴史や技術の歴史を研究する上で、非常に重要な手がかりとなります。

参考文献

舞鶴市史編さん委員会 1993『舞鶴市史 通史編（上）』 舞鶴市

舞鶴市教育委員会 2013『京都府舞鶴市田辺城跡 第29次・30次発掘調査報告書』（舞鶴市文化財調査報告第49集）

九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年—九州陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会

織田政権の城と海

－細川藤孝の田辺築城を考える－

京都先端科学大学 中西裕樹

1. はじめに

天正8(1580)年8月、細川^{ふじたか}藤孝は織田信長より丹後国の支配を^{ゆだ}委ねられ、間もなく宮津城(宮津市)の築城を開始しました。そして天正10年頃、家督^{かどく}を子の忠興^{ただおき}に譲り、幽斎^{ゆうさい}を称する藤孝が築いた「隠居城」が田辺城だと考えられています。

細川氏の丹後支配は、^{けいちよう}慶長5(1600)年まで続きます。この間の出来事として、同年7月にはじまる「田辺^{ろうじょうせん}籠城戦」をあげることができるでしょう。1万5千という西軍の軍勢の前にわずかな手勢の幽斎が田辺城に^{こも}籠り、9月の関ヶ原合戦直前までの約2ヶ月を持ち堪えました。古今伝授を受けた文化人幽斎を惜しむ^{こようぜい}後陽成天皇の^{ちよくめい}勅命により、開城したという戦いです。この後、細川氏は^{かぞう}加増の上で^{ふぜん}豊前国へと移りますが、20年に及んだ細川氏の丹後支配にとって、田辺城は最後に大きな役割を果たしました。

田辺築城がなされた時代は、城に瓦や石垣が本格的に採用され、平地に城と城下という町場が成立する日本城館史上の大きな転換期にあたります。それ以前の城館のあり方も色濃く残る時代ですが、その中で城館の転換を推し進めたのが織田政権でした。

宮津城は、中心部が直接、海に面していたと考えられています。舞鶴市^{だいせんじ}の大泉寺が所蔵する「田辺籠城図」をみると、田辺城を取り巻く西軍の陣所^{じんしょ}と海上封鎖をする軍船の姿があります。少しの距離はありますが、海とともにあった田辺城の特徴を見事に^{みこと}描いているように思います。この細川氏が丹後に営んだ2つの城は、ともに海を意識した立地でした。そこで、本日は織田政権の城と海と題し、細川藤孝(幽斎)の田辺築城を考えてみたいと思います。

2. 細川藤孝が「選んだ城」

丹後に入国した細川藤孝は、まず^{はちまんやま}八幡山城(宮津市)に入ったとされます。戦国時代の日本列島には、2万から3万という数の城が築られました。江戸時代のように大名らの武家が城を独占するのではなく、激しい戦乱の中で村や町の人々も自衛のために防御施設を築いた時代です。城の構造や施設は簡単なものが多く、本格的な石垣や瓦を葺いた^{やぐら}櫓などを持つものは稀^{まれ}でした。基本は地面を平らにして^{くるわ}曲輪という広場を作り、堀を掘って周囲を

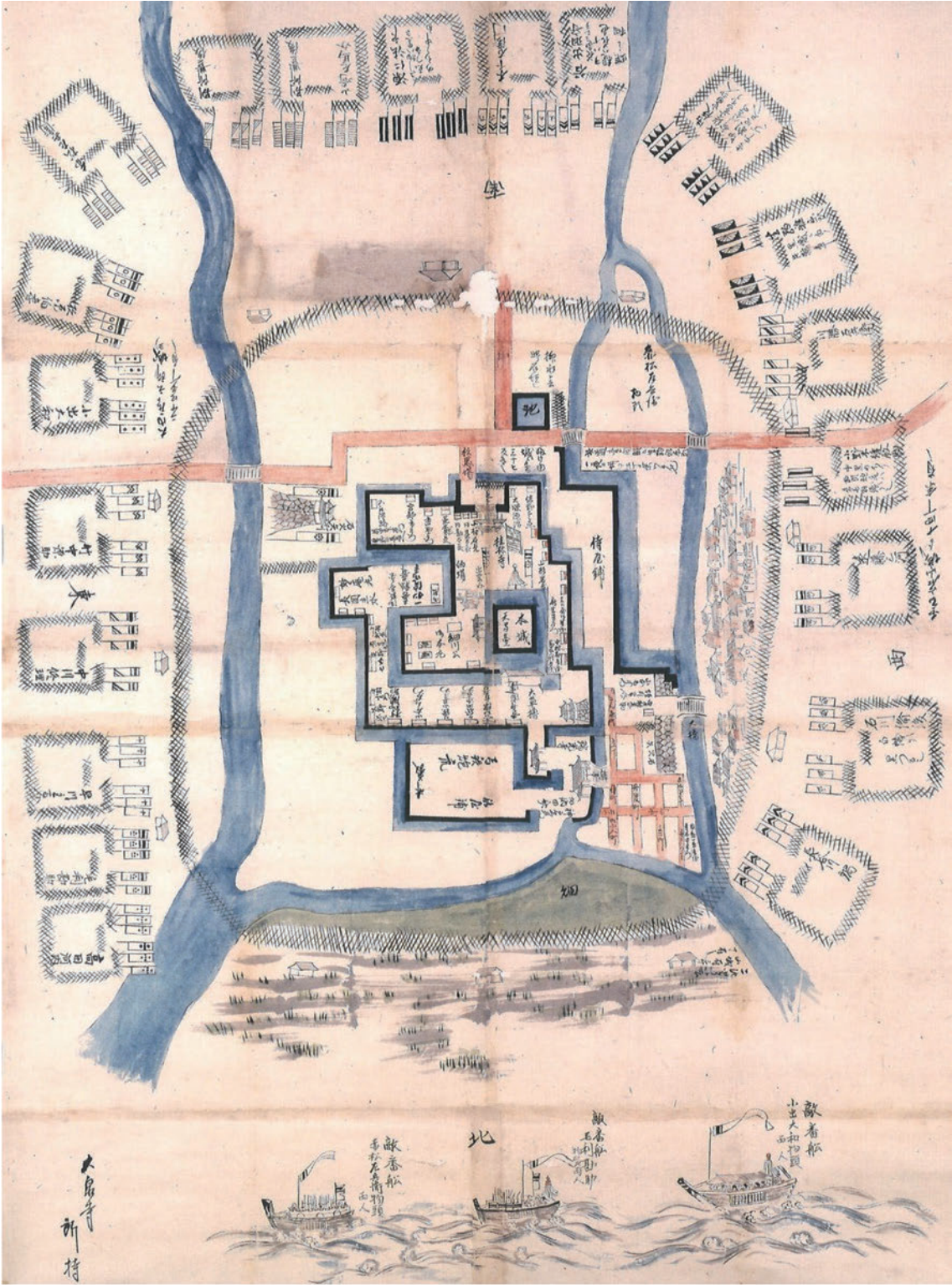


図1 田辺籠城図(舞鶴市大泉寺蔵、京都府立山城郷土資料館編2019より)

遮断する「土づくり」の構造です。建物も板葺きのものが多かったとみられます。

そして立地も平地ではなく、攻められにくい山の上が選ばれました。それまで平地に館を営んでいた大名らも山城^{やまじろ}を築き、山の上に居住して政治、また連歌^{れんが}などの文芸に親しむようになっていました。八幡山城は、丹後国の守護一色^{いっしき}氏の山城であったといわれますが、明確なことはわかりません。発掘調査もなされていませんので、存続した時期も不詳です。しかし八幡山城は標高約165mの山頂に立地し、宮津湾や天橋立を一望します。城の大きさは全長約500mに及び、丹後でも最大規模とされる土づくりの山城です。慎重な評価が必要ですが、これから丹後支配を開始する藤孝が入るにふさわしい、守護が関係するような山城であったのかもしれない。

現在、この城の主郭(本丸)には、自然の石材を5石程度積み上げた石垣が確認できます。藤孝が丹後に入った頃、織田信長と配下の武将らの城郭では、高石垣^{たかいしがき}と礎石^{そせき}の上に瓦を葺く分厚い壁の櫓、虎口(城の出入り口)の枳形^{ますがた}(広場)、そして天主(守)というシンボルタワーを備えた城館が徐々に姿を現していました。この流れは豊臣秀吉に受け継がれ、江戸時代の近世城館(戦国時代は中世城館)のプロトタイプとなります。城館研究では、このような城館を「織豊系城郭^{しよくほうけいじょうかく}」と呼び、その画期は天正4(1576)年～同7年に築かれた織田信長の居城・安土城(滋賀県近江八幡市)にあったととらえています。八幡山城に石垣は、この織豊系城郭の要素を藤孝が丹後に持ち込み、築いたものだと考えられています。

間もなく、藤孝は宮津湾に面して宮津城という居城を築きました。藤孝は、この築城について信長から承認を得、信長が8月21日付で藤孝に宛てた書状には「畿内ニ有之諸城大略令破却候」と文言があります(『細川家文書』)。藤孝が丹後に入った天正8年という年は、織田政権が大和・摂津・河内などで従来の城館を破壊する「城わり」を実施した年でした。そして各国で支配の拠点とする城館を数ヶ所選び、また新規に築城して存続させました。このとき摂津・河内・和泉では、戦国時代に発達した寺内町や港町とセットになるような立地の城館が選ばれました。

また、天正10年に羽柴秀吉が8月8日付で藤孝に宛てた書状には、要らない城を壊して大切な城だけをしっかりと普請^{ふしん}するようにとの命が記されていました(『細川家文書』)。丹後国内でも、藤孝が新しい拠点城館を選ぶ状況にあったと思われます。そして、選ばれた主な城館は次のとおりでした。

- ・宮津城…細川藤孝→細川忠興
- ・田辺城…細川藤孝(幽斎)
- ・吉原山^{よしわらやま}(峯山^{みねやま})城(京丹後市)…細川興元^{おきもと}(忠興弟)
- ・松倉(久美浜)城(京丹後市)…松井氏(有力家臣)

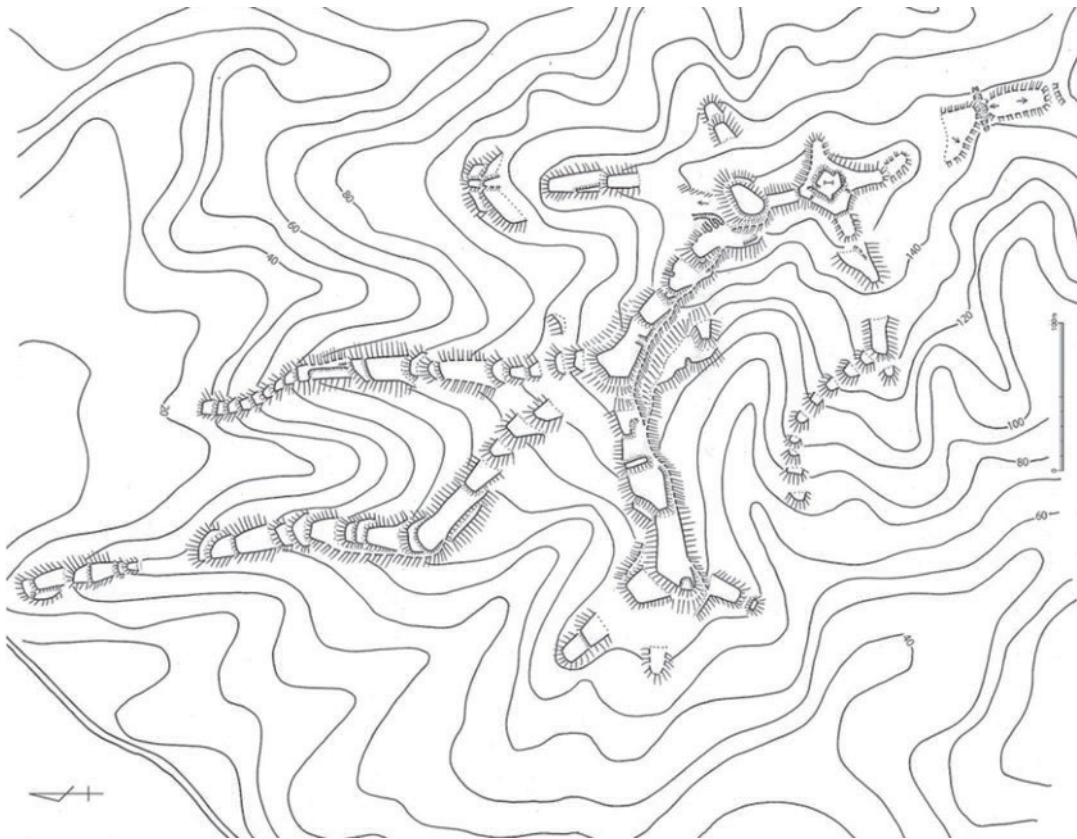


図2 八幡山城跡(京都府教育委員会HPより)

- ・安良山（加悦有吉）城（与謝野町）…有吉氏（有力家臣）
- ・中山城（舞鶴市）…沼田氏（有力家臣）

このうち、新規の築城は宮津城と田辺城だけで、他の城は以前から機能していた土づくりの大規模な山城でした。

話が飛ぶようですが、若かりし藤孝は室町幕府13代將軍足利義輝^{あしかがよしてる}に仕えていました。この義輝と争った畿内の戦国大名に近年、信長に先駆けた天下人として評価が高まる三好長慶^{みよしながよし}がいます。三好氏は畿内と周辺を支配した勢力で、長慶は藤孝と同じく一族と有力家臣に拠点城館を委ねました。その多くは従来から守護らが使用していた山城でしたが、重臣の松永久秀^{まつながひさひで}が大和に築いた多聞城^{たもん}（奈良市）だけは新規の築城でした。

多聞城では瓦を葺いた櫓が林立し、奈良という古代以来の都市に接した台地上に立地しました。他の城館は山城であるために近くに大きな町場はなく、使用理由は前の支配者からの継承というものでした。しかし、新規築城は周辺のロケーションも選べるのです。都市に近い、平地に近いという特徴を持つ多聞城は、異彩を放ちます。しかし、これこそが三好氏が本当に目指した拠点城館のあり方を示すように思います。丹後では、このタイプの城に宮津城と田辺城が該当します。そして繰り返しますが、2つの城は海を意識した場

所に築されました。

3. 織田政権の城と「海」

では、城館の歴史を変えようとしていた織田政権の城と海との関係を広く確認したいと思います。言うまでもなく、藤孝も政権の一員です。

中井^{ひとし}均氏の研究によれば、藤孝が丹後に入った頃の近江国には特徴的な拠点城館の配置がありました。信長の安土城、秀吉の長浜城(長浜市)、明智光秀の坂本城(大津市)、織田^{のぶすみ}信澄^{おおみぞ}の大溝城(高島市)は、いずれも琵琶湖の港近くに立地します。戦国時代にも港を意図した城館は存在し、琵琶湖や流入する河川の港に隣接する城館はありました。しかし波による浸食を防ぐ備えが必要になるため、中井氏は石垣を本格的に導入する織豊系城郭の段階において、城館は海・湖・河川を取り込むことが可能になるとしました。そして、これを「湖の城の城郭網」と呼び、その目的は琵琶湖の制海権と物資の掌握にあると評価しています。滋賀県で「うみ」といえば、琵琶湖を指します。そこで、以下では琵琶湖を含めて「海」として扱いたいと思います。

細川藤孝が信長の前に仕えた將軍足利^{よしあき}義昭も、「海」に関係する城館を運用していました。元龜^{げんき}4(1573)年に將軍義昭が反信長の挙兵に動いた際、義昭方の山岡^{かげとも}景友^{こうじょういん}(光浄院暹慶)は「海」湖南岸の石山城(大津市)に籠り、磯谷^{いそがい}久次^{ひさつぐ}と渡辺^{まさ}昌は「海」の交通拠点であった堅田^{かたた}(大津市)の今堅田^{いまかたた}城で挙兵します。やがて義昭自身も洛中の御所(旧二条城跡。上京区)から榎島^{まきしま}城(宇治市)に移りますが、榎島は「海」から流れ出た宇治川が巨椋^{おぐらいけ}池に流れ込む河口の中洲にありました。

巨椋^{おぐらいけ}池は京都南郊の巨大な淡水湖で、桂川・宇治川・木津川が合流し、大阪湾に流入する淀川の起点でもありました。この池周辺には、義昭重臣の三淵^{みつぶち}藤英^{ふじひで}の伏見城(伏見区)があり、淀^{よど}城(同)には石成^{いしなり}友通^{ともみち}が籠りました。いずれも「海」からの淀川水系における水陸交通の要衝や結節点と重複、隣接した立地です。藤孝の勝龍^{しょうりゅう}寺城^じ(長岡京市)も、この近くにありました。織田政権の前史として、紹介しておきたいと思います。

目を転じると、伊勢国では藤孝の宮津築城と同じ天正8年、信長の子・信雄^{のぶかつ}が新たな居城として松ヶ島^{まつがしま}城^{まつさか}(松阪市)を築城しました。この城は海に直接面したようで、付近は従来から「大船」が停泊する港、また大きな町場があったと考えられています。このような場所での築城には、当然埋め立てを伴う工事が必要であったでしょう。宮津城、田辺城に通じるものがあると思います。

総じて、この頃の織田政権の拠点城館は、「海」の交通・制海権と物資・兵站の掌握を意識し、石垣という織豊系城郭の特徴を活かすことでこれを可能としていました。



写真1 安土城跡からみた琵琶湖



写真2 安土城跡の天守台

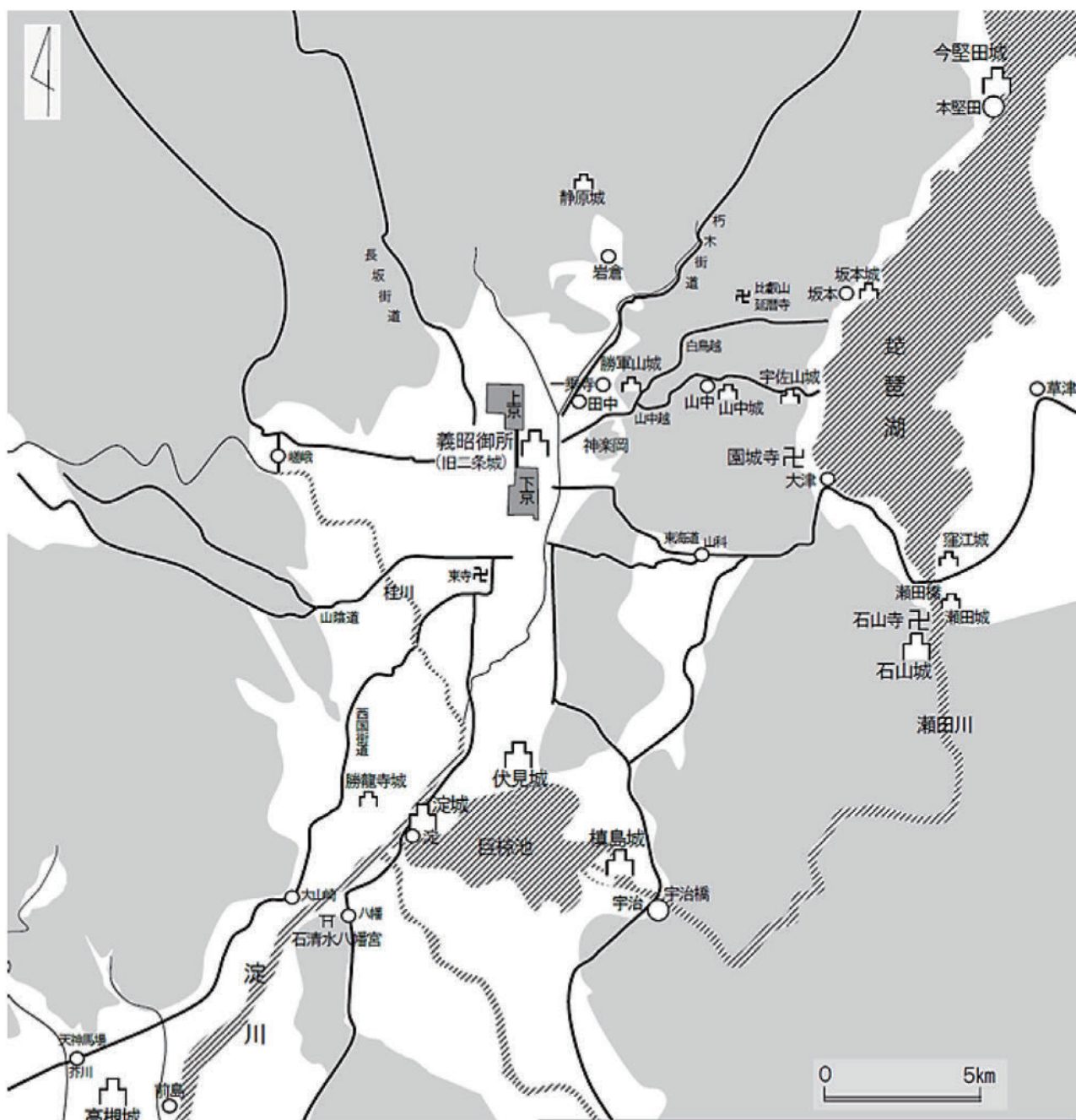


図3 元亀4年の足利義昭方の城館と淀川水系

但馬^{たじま}では、戦国時代のはじめまで守護山名氏^{やまな}が海に近い今の城崎^{きのさき}周辺（豊岡市）に拠点を置きましたが、やがて内陸部の此隅山城^{このすみやま}（同）に拠点を移しました。伯耆でも、海に面した拠点城館が本格的に機能するのは、天正19（1591）年の吉川元春^{きつかわもと春}になってからです。出雲では、尼子氏が営んだ内陸部に富田城^{とだ}（安来市^{やすぎ}）という拠点城館を営み、関ヶ原合戦後に出雲に入った堀尾氏^{ほりお}によってようやく「海」^{しんじ}（宍道湖）の近くに松江城^{しんじ}（末次城。松江市）が築られました。

周辺国からみると、海を意識した藤孝による宮津城と田辺城の「先進性」が垣間見えます。信長の下、丹後支配を任された藤孝^{めんもくやくじょ}の面目躍如^{めんもくやくじょ}といったところでしょうか。

4 細川幽斎の田辺築城

先の「はじめに」において、藤孝の「隠居城」として田辺城が築かれたとしました。天正10（1582）年の本能寺の変で信長が最期を遂げた後、藤孝は「幽斎」となった家督を忠興に譲ります。田辺城はこの頃の築城と考えられるため、本章のタイトルを「細川幽斎の田辺築城」とした理由です。そこで、以下では家督を譲った人物の城という視点から田辺築城をとらえてみたいと思います。

家督を譲った人物の城として、信長の安土城、また以前の天下人ともいう三好長慶が河内国に営んだ飯盛城^{いいもり}（四條畷市^{しじょうなわて}・大東市^{だいとう}）があります。言うまでもなく、安土城で織豊系城郭は本格的に姿を現しました。飯盛城では、近年の調査によって本格的に山城に石垣を導入したことが明らかにされました。それまで三好長慶が居城とした摂津国^{あくとがわ}の芥川城^{たかつき}（高槻市）でも石垣は確認できますが、飯盛城では総石垣に近いようなイメージを受けます。

家督に加え、信長は尾張と美濃という織田氏の本拠と岐阜城という居城を子の信忠に与えました。長慶は摂津と守護細川氏の芥川城を子の三好義興^{よしおき}に、河内と守護畠山氏^{はたけやま}の高屋城^{たかや}（羽曳野市^{じつきゅう}）を弟の三好実休^{じつきゅう}に与え、自らは新たな大和支配を目指して河内・大和の国境に移りました。このような立場になった隠居、つまり先代当主の城館が従来とは違うオリジナルに富むものになったことがおもしろいと思います。

続けて、「太閤^{たいこう}隠居城」と同時期の記録にみえる秀吉の指月伏見城^{しげつ}（伏見区）に注目します。秀吉は天正11年に大坂城を築きますが、この地は戦国時代に大坂本願寺^{おおさかほんがんじ}と寺内町^{じないちょう}があった場所で、瀬戸内海からの多くの物資が集積される場でもありました。秀吉は大坂を押さえることで、西国方面への天下統一の戦争を展開していきます。

同14年には関白にふさわしい京都の屋敷として聚楽第^{じゅらくだい}を築きます。当時の人々は「城」とは呼びませんが、明らかに聚楽第は天守や高石垣をそなえた織豊系城郭でした。そして秀吉は天正19年^{おい}に甥^{ひでつぐ}の秀次に家督と聚楽第を譲り、翌年から指月伏見城の築城をはじめま



写真3 宇治川堤防よりみた指月伏見城跡

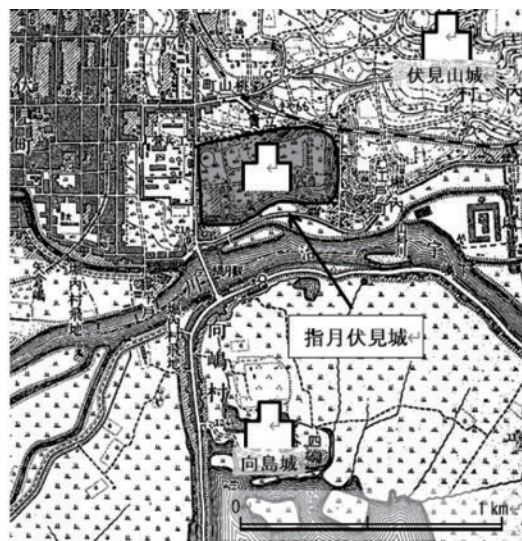


図5 指月伏見城跡の位置

す。

豊臣政権下の拠点城館の立地として、天正13年の四国攻めを念頭に播磨の船上城（明石市）と紀伊の和歌山城（和歌山市）ではその兵站を担った港との接点が指摘されています。また、同年以降の蜂須賀氏が阿波に築いた徳島城（徳島市）では、「島普請」と呼ばれた大規模な造成の結果、内湾部の利用を可能とするものになりました。政権下的大名においては、天正16年に小早川氏が筑前で築城した名島城（福岡市東区）や同19年の長宗我部氏による土佐の浦戸城（高知市）が港湾を意識して海岸や河口部に立地します。中井均氏によれば、これは国内平定後の臨戦体制下において朝鮮出兵を念頭に置く豊臣政権の意図が反映したものでした。

さて、秀吉は天正12年に山城国の淀城（伏見区）に入り、京都と大坂との往来に際して使用しました。先述のように淀城は巨椋池近くに立地し、ここは京都の外港であった淀津の所在地でもあります。そして同20年に同じく巨椋池に面した地ではじまった築城が指月伏見城です。文禄3（1594）年になると、指月伏見城の工事は淀城の破却、周辺での築堤工事（槇島堤・小倉堤・淀堤）と並行しました。一連の工事は城の直下に宇治川の流路を固定し、堤上を通る大和からの街道と結節、琵琶湖からの瀬田川と桂川、木津川などを集めて大阪湾に至る淀川水系の交通を再編するものとなりました。

後に、伏見城は武家政権の所在地となって秀吉はこの地で没し、徳川家康・秀忠・家光はこの城で将軍になりました。「隠居」の城は、大坂築城以来の秀吉の城と琵琶湖から淀川水系、大阪湾へという「海」との関係性を完成させ、その重要さは後に受け継がれます。丹後の場合、当主の宮津城と「隠居」の田辺城が存在しました。興味深いことに、関ヶ原合戦に際し、細川氏の拠点城館として機能したのは田辺城でした。江戸時代、田辺城は独

立した大名の居城として存続します。宮津城の機能を補い、それに有り余る機能を持ったのが田辺城だといえるでしょう。「隠居」たる、幽斎の先見の明であるようにも思います。

5. おわりに

後の江戸時代、肥後熊本藩主となった細川忠興（三斎）は、八代城（八代市）に隠居しました。この城は新規築城ではありません。戦国時代、周辺を支配した相良氏は山城の古麓城（同）を拠点城郭としましたが、秀吉の下で肥後を納めた小西行長が海に面した麦島城（同）を築き、これが地震で倒壊した後、肥後を治めた加藤氏が後継に築いたのが八代城です。かつて、丹後で当主の城＝宮津城、「隠居」の城＝田辺城とした細川氏は、肥後で当主の城＝熊本城、「隠居」の城＝八代城としました。当主と「隠居」の城と使い分けや海との関りにおいて、何だか通じるものを感じます。

田辺城は、丹後に細川藤孝が持ち込んだ織豊系城郭であり、先進の立地をとるものでした。さらなる調査研究の進展を期待したいと思います。

【主な参考文献】

京都府立山城郷土資料館編 2019『光秀と幽斎～花開く武将文化～』

小島道裕 2005『戦国・織豊期の都市と地域』 青史出版

中井 均 1997『近江の城～城が語る湖国の戦国史～』 サンライズ出版

中井 均 2022「織豊系城郭の地域的伝播と近世城郭の成立」『織田・豊臣城郭の構造と展開』 下
戎光祥出版（初出は2002年）

中西裕樹 2008「畿内都市からみた信長の城下町」 仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』 高志書院

中西裕樹 2014「城郭史上における指月伏見城 - 織田・豊臣政権の城郭と港湾」 小和田哲男先生古
稀記念論集『戦国武将と城』 サンライズ出版

中西裕樹 2020「元亀四年の足利義昭の挙兵と淀川水系の城郭」『しろあとだより』 21 高槻市立し
ろあと歴史館

福島克彦 2002「細川氏の時代」『宮津市史』 本文編上 宮津市



第 160 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 8 年 7 月 18 日（土）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<https://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877（代表） Fax (075) 922-1189



FB



X